

## 4. 小学校を拠点とした世代間交流

松本市地域づくりインターン第3期生・田川・寿地区担当 小林 克紀

### 1. 地域社会の変化と子どもの現状

近年、子どもを取り巻く遊びの環境が厳しさを増している。特に子どもの育ちに欠かすことのできない「サンマ(時間・仲間・空間)の喪失」が、問題視されるようになってきている。「サンマの喪失」とは何か。まず「時間の喪失」とは、塾や習い事の増加により、時間に追われる子どもが増えているといった例にみられるように自由な時間の減少していることがあげられる。ふたつめの「仲間の喪失」とは、少子化が進み、かつて自然にできていた異年齢集団との遊びが現在では生まれづらいつという現状があることである。さらにマンションや駐車場と変わり公園ですら禁止事項満載となった管理型の空間へと変わっていくことによって、広場や空き地のような子どもが自由に遊ぶことのできる「空間の喪失」がおきている。

さらには、この「サンマの喪失」に加えて、「関係性の喪失」が問題視されるようになってきているのではないだろうか。近年、異年齢と遊べない、自分の感情を上手く表現できない、といった「コミュニケーションの苦手な子ども」が増えていることが問題視されている。また過保護やネグレクトといったように親子の関係性のゆがみもみられるようになった。また、子どもに挨拶をすると不審者扱いされる、子どもが地域で悪さをしたときに直接に叱ることができず、行政や学校に連絡するといったように大人と子どもの関係性のズレもまた目立つようになってきている。このことから、地域において遊びを通じて生まれていた関係性が育ちにくくなっていることがいえる。

子どもの遊びを通じた環境の変化は、長野県も例外でない。非営利活動法人ワーカーズコープ上田事業所長の土屋一夫氏は「上田市の児童が減っている状況のなか、児童クラブ登録者数は増加している」と述べ、「核家族、共働き、1人親といった家族の形が増え、同時に困難を抱え

た家庭も増えたことによるものではないか」と指摘している。また、土屋氏は、子どもにとって放課後という時間の重要性を述べている。子どもにとって放課後とは一日の学校と家庭での役割の間にある自由な時間であるため、子どもたちが自主性を発揮できる場、友達を作ることのできる場、時に大人に叱られる場としての時間が保障されている。このように放課後という時間は子どもの育ちにとって重要な時間となっており、この放課後の時間のあり方次第では子どもに大きな影響があるといっても過言ではないだろう。

また、渡辺 顕一郎は、その著書『地域で子育て』の中で、「昔は相談機関がなくても井戸端で相談して悩みを共有したり、他人の子どもに優しく声を掛けたり時に叱ってくれる人がいた。それは『援助する』という構えがないごく自然な人と人のふれあいの場であった。」と述べている。このことからみてもわかるように家庭内の変化だけでなく地域とのつながりが希薄化していることも子どもの育ちに関係しているといっていよう。

### 2. 研究課題

これらのことから、近年、地域社会の変化に伴い子どもや成人、高齢者といったすべての世代における環境の変化が著しく生じていることがわかった。具体的に子どもの環境の変化については、生活場所の喪失や地域住民との関わりの希薄化という点が目立っており、子どもの成長、教育という面において様々な課題が浮上している。地域としては、失われつつある世代間交流の機会を取り戻すことに力を入れている傾向にあるものの、課題の解決までは難しいのが現状としてある。実際に私自身も地域づくりインターンとして地区に入ったことで、子どもの「サンマの喪失」によって地域住民との関係性に変化が生じていることを実感した。また、地域における

学校という場所に住民が入ることは敷居が高くなっているように感じた。学校での交流行事はあっても単発で終わってしまうことが多いこともまた子どもとの関係性の構築が難しくなっている要因ではないかとも感じた。このことから、小学校を拠点として定期的な活動を行うことで、子どもと地域住民が顔を合わせる機会が増え、地区にとっても学校に対する敷居が低くなるのではないかと考えた。また、その活動を通して地域住民と子どもをつなぐ場となれば、「サンマの喪失」の解決のきっかけとなるのではないかと考えた。

以上の理由から、主に小学校を拠点とした世代間交流を進めていくこととした。小学校にて交流を行うことが、子どもの現状を知ることや子どもと地域住民との関係性の変化につながるかという点に着目しながら、子どもの「サンマの回復」に向けて取り組んでいくこととした。

### 3. 田川地区活動報告

#### 3-1 田川地区概要

まず初めに4月～8月中旬まで担当した田川地区にて進めた活動について述べていきたい。田川地区はJR松本駅の西側に位置する地区で3721人の人口(平成29年)から構成されている。地区内の交通機関の充実や大型商業施設、医療の充実といったように生活圏内で多くのサービスが利用できるという長所がある。高齢化率28.7%という数字は市の平均よりも高い数字となっている。新規マンションの建設により比較的若い世代の増加も見受ける町会もあれば高齢化が深刻化している町会もあるなど、高齢化率は町会によって差が生じているという特徴がある。

#### 3-2 地区住民と小学校との交流

インターンとして地区に入ってから、子どもと地区住民が関わる事業として田川小学校の地域交流に参加した。この地域交流とは、田川小学校の授業参観後の保護者懇談会を行っている2時間ほどの時間において地域住民と生徒が交流を行うという企画である。この活動は田川小学校前教頭先生から保護者懇談会の時間に子どもと遊べる企画を行えないかと要望を受けたことがきっかけとなり昨年度から実施されているものである。対象生徒は1年生～3年生の希望者としており、地域住民と生徒の交流だけでなく、

他学年の生徒と交流ができるといった特徴がある。また、懇談会終了後に親子で下校することができるため、親御さんと子どもの安心にもつながっている。

私は地域交流には2回参加したが、大人が紙飛行機やバルーンの作り方を教えて一緒に遊ぶ様子もみられるなど子どもと大人の双方が楽しむことのできる企画となっていると感じた。この他にも、遊びながらゴミの分別を学ぶことのできる「エコキューブ講座」や、朝読書の時間に地区住民が本の読み聞かせを実施するなど、小学校を拠点とした地域住民が関わった様々な交流事業が行われている。

#### 3-3 地区課題の発掘

インターンとして田川地区への配属が決まってから、地区内を散策し、地区の特徴や町会の場所の把握に努めることとした。この散策を行うことにより、地区の長所や課題が少し見えてきた。

この散策にて明らかになった課題は主に2点ある。1点目に買い物を行う場所の少なさを感じた。田川地区は、渚町会に大型商店である「なぎさライフサイト」があることから、買い物の利便性には優れているといわれることが多いが他の町会をみると商店が少ない。また、なぎさライフサイトを利用している方でも「立体歩道橋を利用するのは大変だし、冬場は足場が凍るから怖い」といった声も聞いた。このことから、実際に買い物に関する課題は存在していることといえるであろう。この課題は、現在、自動車を使用できる方が多いため顕著となっていないが、高齢化が進むことにより深刻化する可能性のある課題ではないかと考えられる。

2点目は子どもの野外での遊び場が少ないのではないかと感じたことである。神社や公園といった子どもの遊び場が存在しない町会もあり、仮に神社や公園があるとしても、子どもがのびのびと遊ぶのには敷地が狭い環境である。また、地区内の散策を小学校が終わる夕方に行くと公園や神社にて遊ぶ子どもは少ないことも感じた。この散策以外にも地域住民と会話をした際に「近年、子どもと外ですれ違っても挨拶をしあうことがない。むしろ知らない人に挨拶をしてはいけないと教わる子どもが増えているという現状を知った。

### 3-4 田川小学校夏まつりでのふれあいコーナーの実施

#### (1)活動背景

田川小学校では毎年、小学校とPTAが主催となって、夏まつりが開催されている。この夏まつりは、地区住民によるバザーやブースの出展を通じて地域の通じた交流行事となっている。その中の企画の1つで、地区住民と子どもの交流スペースである「ふれあいコーナー」は、田川公民館が事務局となり、企画・運営を進めている。このふれあいコーナーを開催することは、普段関わりを持つことのない地区住民と子どもをつなぐこともでき、双方が交流できる時間となる。実際に地区住民と子どもたちが交流を行うことで、実施前と比べて子どもと大人の関係に変化が現れるかという点が明らかにしたいと考えた。また、小学校を拠点とし交流をするということにどんな意味があるのかを考えていきたいと考えた。

#### 活動詳細

活動日	7月8日(土)
活動場所	田川小学校なかよし教室
参加スタッフ数	35名
参加子ども数	300名ほど
実施時間	10:20~13:30
趣旨	地域の大人と子どもが遊べる場として「ふれあいコーナー」を開催する。核家族化により世代間の交流が減少している背景から、他世代と遊ぶ機会を作ることで互いの身近さを体験してもらうと同時に、今後、子どもと大人が交流しやすいような地域のきっかけとする。
事前準備	【スタッフ募集方法】チラシでのスタッフ募集、公民館講座に出向き、講座参加者へスタッフ募集の呼びかけを公民館長と実施。 バルーン講座として専門講師を招き講習会の実施。
出展ブース一覧	【かるた、ダーツ、けん玉、じゃんけん、折り紙、マンカラ、皿回し、輪投げ、ビーンボウリング、バルーン交換所】

ブース内容に関しては、昨年度に実施した内

容が好評であったことを聞いたため、あまり内容を変更せず、企画案の作成と準備を進めた。ただ、未就学児が遊べるブースが少ないこと、のんびりと遊べるブースが少ないのではないかと感じた。このことから今年度から折り紙のブースを新しく設置することとした。

#### (2)当日の様子、振り返り

当日は多くのスタッフと子どもの参加があり会場はにぎやかなものとなった。良かった点は土曜日の開催であったため、平日の公民館行事には参加していないスタッフの参加がみられたという点である。このことから、子どもと交流するということに関心がある方が数名いること、関心があっても勤務の都合により参加できないといった現状がわかった。勤務している方と子どもをつなぐことができたということは貴重な機会となったのではないかと感じた。新規で設置した折り紙のブースには未就学児だけでなく、小学生も参加し、スタッフと折り紙を楽しむ様子が見られた。ただし、来場者が多くブースも多かったことからわいわいとした空間であったため折り紙は落ち着いた環境で行いたいと感じた。このことから休憩室といった形でのんびりと折り紙をしたり話ができる部屋を用意することができればなお良いのではないかと感じた。また、親子でふれあいコーナーに参加する方が多かったことから子どもと地域住民が交流できる場以外に親御さんも参加できる企画があればより多くの人を巻き込める企画となるのではないかと感じた。また、小学生の子や孫がいる方は小学校に入る機会は少なからずあるのではないかと感じるが、関係者が居ない方が学校に入る機会はほぼないことがわかった。

しかし、互いの交流行事が減りつつある今、定期的に地区の人が学校にすることができれば、関係性の変化は生まれ、子どもの見守りにもなると感じた。両者の関係性の変化という点では終了後に「楽しかった」という声を聞くことができ、関わりを持つきっかけづくりにはなったと感じた。ただ、年に1回という回数は少ないと感じた。このふれあいコーナー以外の行事も単発で終わってしまうものが多く、学校をより敷居が低い場所にするためには、定期的に学校入れる行事が必要ではないかと感じた。



当日のふれあいコーナーでの様子

### 3-4 けやきっ子寺子屋の開催

#### (1)活動背景

6月の下旬に巾上西町会長である筒井敏男氏と会話をしていたところ、夏休み期間に松林比呂子氏の敷地内にて子どもの居場所づくりを行えたらどうかという話になった。このきっかけは4月に松林氏の敷地にて地域の方の居場所づくりとしてけやき祭りを開催した際に、場所として良かったため夏頃にまた何かを行えたらという話が出ていたこと、子どもの居場所づくりを自然のある環境にて行いたいという2つの理

由からなる。この松林氏の敷地には、広々とした敷地となっており松本市にて指定されている計15本のけやきの保存樹があるため自然に触れ合うという目的にはもってこいの場所であった。この話を松林氏に持っていくと是非行いたいという返事をいただき、開催に向けて準備を進めていくこととなった。また、松林氏から松本大学の学生にも加わってもらうことで子どもも喜ぶのではないかという提案をいただいたことから、松本大学白戸・向井ゼミナールに声を掛け、ゼミナールの学生と活動を進めていくこととなった。この企画は、小学校を会場としたものではないものの、前節の課題の分析にて地区における子どもの遊び場が少ないと感じたことから、敷地を解放することで遊び場とすること、それにより夏休み期間の数日間子どもが安心して過ごせる場とすること、のびのびと遊ぶことのできる場としたいと考えたため開催することとした。また、遊びの際の雑談から子どもの遊びや学習環境を含めた現状を聞くことを意識した。

#### (2)事前準備

6月下旬から開催まで松林氏、筒井氏、松本大学関係者との打ち合わせを重ねた。事業名は筒井氏の発案により、けやきの木の下で行うこと、遊びと学習の両方を行う寺子屋のような事業であることから「けやきっ子寺子屋」に決まった。開催にあたり、子どもたちの内容と時間帯のニーズに合わせて行うことを考えた。時間帯に関しては午後の時間に行うことも考えたが、共働き家庭が増えていることから、朝から正午の時間帯が良いのではないかと結論に至った。内容に関しては宿題と外での自由遊びの開催を行う以外に主催者の当時の経験から自由研究の補助も行うこととなった。また、正午に終了するということからおにぎりなどの昼食の提供もアイデアとしてでたが、食中毒の心配から今回は行わずにスイカ割りのみを行うこととした。時間帯と内容が固まった段階で学生と小学生への周知用のチラシと申込書を作成し、小学校への企画の説明を筒井氏が行うこととなった。

## (3) 考察

## 活動詳細

活動1日目	8月17日(木)
参加子ども数	3名
松本大学関係者数	松大生7名、松大教授1名、 地域づくりインターン2名 計10名
地区住民参加数	3名
実施時間	9時開始 12時終了
活動内容	【水路でのザリガニ釣り、けやき敷地内の探索、 スイカ割り、宿題、自由研究支援】

活動2日目	8月18日(金)
参加子ども数	4名
松本大学関係者数	松大生8名、地域づくりイ ンターン1名 計9名
地区住民参加数	4名
実施時間	9時開始 12時終了
活動内容	【竹の置物作り、折り紙、水路でのザリガニ釣り、 けやき敷地内の探索、スイカ割り、宿題、自由研 究支援】

2日間にわたり寺子屋事業を開催し計7人の子どもが参加した。参加人数こそ少なかったものの、自然での遊びと学習といった環境づくりを行うことができ、内容を楽しんでもらえたことから充実した2日間であったように思える。大学生が学習支援や遊びに関わったことも楽しんでもらえた1つの要因となったように思えた。参加した子どもたちの様子から、ザリガニ釣りやけやきの敷地内での散策といったように自然と触れ合う機会はあまりないことがわかった。「そもそも外で遊ぶことが少ない」と子どもたちが言っていたことから、環境の変化による子どもへの影響は少なからず起きているのではないかと考えた。また、学習という面に関しては「自由研究の文章を1人で考えるのは難しいから手伝ってもらえて助かった」といった意見を聞くことができた。参加した子どもの数が少なかったが、子どもたちの現状の一端を知ることができた。そして、実際に子どものニーズにあった企画を行うことができたことは良かった点であると思う。

この2日間で敷地内を使った寺子屋は十分に効果があることがわかった。次回への反省点としては、今よりも地区の方を巻き込んで行うことができれば良かったのではないかと考えている。今回は初めての開催という事から地区住民は松林氏・筒井氏・渚本郷町会長のみ参加という小規模人数で実施することになったが、次のステップとしてより多くの地区住民も参加してもらい、一緒に企画を考えることができれば地区内の住民と子どもの世代間交流にもつながると感じた。けやき寺子屋の終了後に松林氏との会話から、「町会の住民の中には何か企画を行いたいと考えている方が多く、小学生のお孫さんを持つ高齢者が多く住んでいる」ことを知った。このことから、企画の周知方法を改善することによっては、高齢者と子どもが交流する場としても機能するようになるのではないだろうか。子どもだけの遊び場だけでなく、世代関係なく地区の居場所となるのではないかと感じた。子どもの学習支援や遊ぶ環境という課題は地区内ではこれからの取り組みになってくると感じたが、今回の寺子屋がきっかけとなり学習支援を含めた子どもの居場所づくりが町会から地区に広まっていくことになれば良いと考えている。





当日の学習と外での自由遊びの様子

地区概要(平成29年10月時点)

人口	14,399名
高齢化率	22.5% (松本市平均27.2%)
町会数	12

#### 4-2 地区課題・空き教室利用の背景

地区内に子どもの放課後の居場所がないことが地区の課題となっている。これらの課題が明らかとなるきっかけは寿地区の育成会長がPTA役員から「子どもの居場所が無いため欲しい」という相談を受けたことである。この相談を受ける前から地域づくり協議会にて子どもの居場所に関しては議題となっていたが、PTA役員から相談を受けたことでより課題が明らかになる形となった。今後の方針について検討するも、場所をどこで行うのか、(町内公民館を利用するという話も浮上したが、子どもが集まらないこと、鍵の管理や人員の確保という面から開催場所を変えることになった)居場所を作ったとして内容をどうするか、といったように具体的な課題は山積みとなっていた。

そこで寿地区育成会長がPTA役員から相談を受け、育成会長自身が「子どもと昔ながらの遊びをしたい」という気持ちを持っていることを寿小学校の校長先生に伝えたところ、「小学校内の空き教室を使って何か行うことはできないか。」という返事をいただいたとのことであった。育成会長が小学校側の意見を地区の会議に持ちかけ、共有し検討したところ、「空き教室利用プロジェクト」として、まずは、児童についての活動をしている児童福祉部会と寿公民館で考えていくこととなった。このタイミングから筆者はインターンとして寿地区を担当することとなった。定期的にかかっている場所があることで子ども、親御さんの安心となり地区住民という視点においても自分の地区の子は地区で育てることにもつながるのではないかと考えた。学校を使った世代間交流は前地区にて開催したが、単発に終わってしまったため継続的に行うことでの意味というのでも考えていきたい。また、居場所を作り交流を重ねることで場がないこと以外にも課題を見つけることができれば良いと考えている。考えられそうな課題は食事、学習、遊びなどが考えられるが寿における子どもの課題というニーズ発掘も行えたらと考えている。地区住民同士の居場所、

## 4. 寿地区活動報告

### 4-1 寿地区概要

寿地区は昭和29年に東筑摩郡寿村が松本市と合併して誕生した地区であり、松本市街地から南方6kmほどに位置している。農地と住宅地が混在しており、町会によってその特色が異なっている。人口は市内で5番目に多く、高齢化率は市の平均より低い数値となっている。このデータだけみると人口に関わる問題は起きていないように取れるが、人口減少や高齢化の課題が顕著に現れている町会もある。また、緩やかであるもののどの町会でも少子高齢化は進んでいるため、将来的な少子高齢化、地区行事の担い手不足といった課題はある。地区での特徴としては「子どもは寿の宝、地域の子は地域で育てよう」を合言葉とし、寿地区学校応援団が中心となって様々な子どもとの活動を行っていることである。

かわりの場となることも目的として活動を進めていきたいと考え、「空き教室利用プロジェクトチーム」に入って事業に関わっていくこととした。

#### 4-3 開催までの準備と打ち合わせにて明らかになった新たなニーズ

インターンとして寿地区を担当することとなったから、まずプロジェクトチームリーダーである竹渕氏と寿公民館主事と共に、信州大学教職支援センター荒井英次郎准教授に学校における空き教室の利用に関する相談をするために信州大学を訪問した。ここで空き教室利用に関する今後の進め方について話し合い、準備の方向性を固めた。また、この日から荒井准教授に打ち合わせや準備にて、適時、アドバイスをいただけることとなった。9月に入った段階で、プロジェクトチームメンバー計10名と寿小学校校長、教頭との意見交換会が行われた。この意見交換会ではまず、小学校側にプロジェクトチームとして、学校の空き教室を借用して放課後に子どもの居場所づくりを行いたいと考えていることを伝えた。これに小学校側から、空き教室を使った居場所づくりに関して、賛成の意見をいただいた。ただ、学校の現状として、2時間目休みの時間にクラスに馴染むことが難しい子が校長室に遊びに来ていること、普段から学校内に地域の人が当たり前のようにいる環境にしたいが、そこにはまだ至っていないことから放課後に限らず、むしろ昼間の時間帯にやってほしいという意見をいただいた。この当たり前のように地域の人が学校内にいる環境のために空き教室を地域の人の部屋とし自由に出入りできる部屋にするのもありではないかという意見も出た。地域の人を使うということを出た意見としては「地域の人がお茶を飲みながら話をする」、「公民館講座を出前企画という形で実施する」、「地域の人が勉強をする」といったように様々であった。

この日のうちには利用する時間帯については結論が出なかったものの、子どもの居場所づくりに関してはとりあえず昼間という時間帯に行うという方向で進めていくこと、子どもとの交流以外にも教室を地域の人のみでも利用することで地域の人が自由に出入りする学校となることを目標とすることになった。この意見交換会にて子どもの学校での新たな課題を知ることが

できたこと、空き教室を地域の人が集える部屋としても利用するといった案がでたことは大きな収穫であった。この意見交換会にて決まったことに関しては児童福祉部会員と共有すると共にプロジェクトチームで準備を進めていくこととした。

#### 4-4 上田市神科小学校 おたすけっ十有志隊 視察

空き教室を使った居場所づくりを2時間目の休みに行うという方向に決まり、小学校との打ち合わせや準備を進めていたものの、開始するにあたり課題も多く、不安を抱えるメンバーも多かった。そこで、竹渕氏が先進事例を調べたところ、上田市神科小学校学校支援ボランティアである「おたすけっ十有志隊」が、既に校内での子どもの居場所づくり(ゆうゆうタイム)を行っていることがわかった。また、神科小学校の隣である上田ヶ丘公民館では地域活動として子どもに関する事業を開催していることから、上田ヶ丘公民館とゆうゆうタイムの2つの内容で視察を行うこととなった。プロジェクトチームのメンバー以外にも子どもの居場所づくり、交流に興味のある地区の方も参加し計18名で視察を行うこととなった。

##### 視察研修詳細

日時	11月27日(月) 8:00集合 16:00解散
参加者	18名
視察場所	上田ヶ丘公民館、神科小学校ボランティアルーム
内容	上田市公民館活動学習、ゆうゆうタイム見学・意見交換会

ゆうゆうタイムが行われるまでの時間に上田ヶ丘公民館の見学と「おたすけっ十有志隊」が発足となるきっかけとなった「わいわい塾」についての話を聞いた。このわいわい塾とは小学生を対象とした夏休み期間の子どもの居場所づくり事業であり、4日間にかけて自然体験を行っているものである。この事業にはボランティアスタッフとして地区住民だけでなく、地元中高生や大学生も参加しており幅広い世代の交流の場となっている。わいわい塾を開催して「4日間のみ

であることにもったいない」とボランティアスタッフを感じたことが平成26年におたすけっ十有志隊が発足につながり、定期的に子どもとの交流を行いたいという思いからゆうゆうタイムが始まったことがわかった。

きっかけについて学んだところで神科小学校に移動し、ゆうゆうタイムの視察・意見交換会を行った。ここで、ゆうゆうタイムの詳細について少し紹介することにする。

#### ゆうゆうタイム基本情報

実施団体	おたすけっ十有志隊
活動場所	神科小学校ボランティアルーム
内容	子どもと昔ながらの遊びをしたあとに、スタッフでお茶会を行う。
実施日・実施時間帯	学校で授業がある日の2時間目休み時間

上記の通り、基本的にはゆうゆうタイムでは、週5回開催することとなるが、「無理なく自由に楽しんで参加する」をモットーとしていることから、当番制にはせず都合の良い方が参加するという形をとっていた。ボランティアスタッフが不在となった日はこれまでになく平均すると7~8人は集まるとのことであった。このことから子どもだけでなく、地区住民にとっての居場所となっているといえるであろう。

今回の視察では実際に2時間目休みの時間に子どもたちと交流をすることになった。視察前は「2時間目休みという時間だと短くて交流は行えないのではないか」という不安がメンバー間であったが、20分間という時間で十分な交流を行うことができると感じた。むしろ、20分という時間は長すぎず、短すぎない時間であるため、メリハリを持って交流ができていて、メンバーの負担という面を考えても無理なく続けることのできる時間ということから、この時間は企画が長く続いている要因の1つではないかと感じた。また、子ども同士の交流の場、子どもと地区住民の交流の場、住民同士の交流の場として機能しており、多くの人にとっての居場所となっているように感じた。意見交換会では防犯面や各費用など不安に思っていたことを相談することで助言をいただき、メンバーが各々抱えていた不安の解消につながった。参加する子ども

には自由に遊んでもらうことを意識している。その結果として、遊びに関しても子どもたちで遊びのルールを決めて行うといったように子どもたちの自主性もみられている。自由な環境が参加する子どもにとって息抜きの場となっており、休み時間が終わった後の授業に集中して向き合っていることもわかった。この視察研修を通じて実際の現場を体験できたことは大きく、メンバーが「寿でも実施できそうだ」という前向きな気持ちにつながった。実際にイメージができたことによりこの日から寿での実施に向けて準備が本格的に進むことになった。



実際のゆうゆうタイムの様子。教室以外にも野外でテニスと卓球を合わせたテニポンや竹馬

を天気の良い日に実施している。終了後の意見交換会では、寿小学校での実施にむけた情報交換を行った。

#### 4-5 開始までの準備と寿小学校での開催

ゆうゆうタイムへの視察終了後、小学校側と打ち合わせを行い今年度中の開催に向けて日程調整と準備を進めていくこととなる。実施する日程は、今年度は試験的に行うということで曜日を金曜日とし1月から計3回行うこととなった。準備としては会場となる教室の整備、必要物品の用意、チラシによる告知を行った。おもちゃに関しては学校内にすでにあるものを借用する予定であったが、小学校教頭先生から、「学校の物だけでなく地区の人からも集めることをすればより地区で事業を行うということにつながるのではないか」というご指摘を頂いたことから、プロジェクトチームメンバーと地区住民からの寄付を募集することにした。この寄付の募集がきっかけとなりボランティアスタッフとしての参加につながることも期待できそうである。また、教室の名前が決まっていなかったため、検討したところ、子どもたちに自分の考えた教室名を用紙に書いてもらい、決めることとなった。

#### 平成29年度の活動詳細

実施日	1月26日(金)	2月9日(金)	2月23日(金)
参加子ども数	100名以上	27名	77名
参加ボランティア数	14名	14名	14名
活動場所	寿小学校 西校舎多目的教室		
実施内容	2時間目休みの時間に、子どもと昔ながらの遊びを行う。終了後にスタッフでお茶会を行う。		
遊び一覧	【けんだま、ベーゴマ、あやとり、折り紙、将棋、かるた、トランプ、百人一首、輪投げ、お手玉、クロキノール】		

#### 4-6 考察

本稿では、小学校を拠点として世代間交流を進めていくことを通して、子どもたちの「サンマの回復」に至る条件を明らかにしようと試みた。その結果、小学校における拠点には多くの子どもが集まり、地域の方と子どもの交流ができる場となった。3回の開催にて子どもの人数に差はあったものの、毎回一定数の人数は集っていた

ことから子どもの遊び場としてのニーズがあったといえるであろう。昔ながらの遊びが多かったため、内容によっては子どもが遊び方を知らない遊びもあったが、その際に大人が子どもに遊び方を教えながら一緒に楽しむといった様子が見られた。ただ遊ぶというだけでなく、お互いに話をしながら楽しむことができていたため、現在、失われつつある双方の関係性の構築のきっかけとなったと言えるのではないかと。実際に行うことで、地域の方と子どもの双方が来年度も継続して行いたいと思える企画となった。

子どもとの交流をしたボランティアスタッフからは「孫と遊んでいる気分」という意見があったことや終了後のお茶会を兼ねた反省会でのスタッフ同士の交流から、子どもだけでなくスタッフにとって楽しむことのできる場となっているように感じた。子どものニーズの把握という点は、子どもとの会話から「冬場は外に出て遊ぶことがないから、よかった」という意見があったことや終了の際に「次はいつやるのか」を多くのボランティアスタッフが聞かれたことから、休み時間の交流を楽しみにしている子が多くいることがわかった。次の予定を子どもに伝えた時に、「だいたい先だね」と言われたこと、また伝えた自分も次回までに間が空いてしまうと感じたことから回数を重ねるうちに週に1回の開催といったような工夫も必要になるかもしれない。

小学校側との打ち合わせの際に「空き教室が地区の方が使えるような部屋になれば良い」という意見があったことから、公民館講座である「古文書講座」を空き教室にて開催することにつながった。講座の参加者には小学校にくることは子どもが卒業して以来という方や、ほとんど行かないという方が多くいた。普段小学校に行かないという方が校内に入ることができたことは地域にとって開かれた学校という課題解決へのきっかけとなったのではないかと。

開催にあたり3回の活動を通じて告知の重要性が明らかになった。初回は当日の朝に教頭先生が職員会にて告知を行ってくださったことにより、教室内はとても賑やかな環境となったが告知行わなかった2回目は大きく子どもの数が減ってしまった。この結果から最終日である3回目は事前に掲示板への案内と教室前に告知の用紙を貼ったところ、また人数がかなり増えた。2週間おきに実施すること、まだまだ回数を重ね

ていないことから告知は必要であり、それを行わなかったことは次年度への反省点としたい。

教室名アンケートに関しては1回目と2回目で実施をしたところ、計19通の応募があった。この中で「にこにこ」と書いてあったアンケートが数枚あったことから、教室名を「にこにこルーム」とし、空き教室利用プロジェクトという企画名から「にこにこルーム応援隊」として活動を進めることに決まった。最終日となる2月23日の終了後ににこにこルーム応援隊発足会が行われた。ここでは、役員体制や来年度の予算の件や来年度の本格的な活動に向けて行う準備について話し合われた。具体的にはユニフォームの作成、メンバー間の心得の作成、年会費の設定、新規メンバーの募集についてである。これらの準備を3月～4月にかけて行い、来年度の初回に整った状態で開催できるように準備を進めていくとする。



活動と終了後の反省会兼お茶会の様子

## 5. 来年度の活動にむけて

田川、寿の両地区にて小学校を拠点とした世代間交流に取り組んできた。田川地区に関してはふれあいコーナー、けやきっ子寺子屋の両企画とも単発で終わってしまったことから、研究課題の解決には至らなかった。しかし、企画を行うことで子どもの生活の現状把握や町会における新しい人材の発掘へとつながった。両企画においても、子どもと関わりたい住民をどう活動に呼び込んでいくかが今後の課題と言えるであろう。寿地区ののこにこルーム応援隊については、今年度は実際に小学校での活動に移すことができたこと、組織化といったように来年度への活動に向けての土台づくりができたことから順調に進んでいると感じる。この活動を来年度から定期的で開催することで地域住民にとっては学校へ入りやすい環境となるのではないかと。この企画は2時間目休みという短い時間であるものの、のびのびと遊ぶことのできる時間となり、他学年の児童との仲間づくりを通じた遊ぶことのできる空間となったと感じる。また、地域の方と交流をすることから、大人との関係性の喪失という課題解決にもつながるであろう。このことから、小学校を拠点とした世代間交流はつながりの構築となり、サンマの回復につながるのではないかと。失われつつあるサンマが回復することにより、地域で子どもを育てることに近づき、子どもが安心して成長できる地域につながっていくことが期待できそうである。

来年度はこののこにこルーム応援隊を月2回ほどのペースで継続して行うことで、地域住民と子どもにとって定期的に顔を合わせることで、地域住民と子どもにおける関係性の変化という点に着目していきたい。また、子どもへのアンケートを行うことでニーズを把握し本来、目標であった放課後での居場所づくりに発展させることができれば良いと考えている。夏休みといった長期休み期間は、1人で過ごす子が増えていることが田川地区で活動をしている際に発覚したことから、寿地区でも寺子屋事業のような活動を地域住民と共に行うことができたらと考えている。

### 参考文献

- ・「子ども・子育て支援と社会づくり」P143、P144 編集代表 久保健太 発行 株式会社ぎょうせい
- ・「長野の子ども白書2015」P 122、P 123 編集・発行 長野の子ども白書編集委員会
- ・「地域で子育て：地域全体で子育て家庭を支えるために」P11、P13 筆者 渡辺顕一郎、中橋恵美子、野町文枝、松田美穂 編集者 渡辺顕一郎 出版社 川島書店

### [資料]

#### 資料1 けやきっ子寺子屋開催チラシ

## ★ けやきっ子 寺子屋 開催のお知らせ

緑と景観を考える会、松本大学主催

けやきのある敷地内にて、小学生を対象とした寺子屋を開催します。  
松本大学生や地域の方と宿題や自由研究を一緒にやいませんか？

**場所 住所** 湊地区 松林邸敷地内  
(旧バチンコVEGA×VEGA 店前)  
※詳細は裏面をご覧ください。

開催日程			
日	日	時間	内容
8月17日	(木)	9時00分から12時	・船強(夏休みの宿題) ・自由研究
8月18日	(金)	9時00分から12時	・船強(夏休みの宿題) ・自由研究

**参加費 300円**

※行事用保険加入の費用です  
当日受付にて参加費と共に保険証のコピーをお預かりします。お子様に持たせて下さい。

※大学生たちや地域の方と一緒に船強や遊びを学び、新しい夏休みの発見をしませんか



資料5 世代間交流 寿小に拠点(市民タイムス 平成30年1月13日 土曜日)

資料6 寿小 住民と遊びで交流(市民タイムス 平成30年1月27日 土曜日)

# 寿小住民と遊びで交流

## 休み時間に 空き教室で

松本市内 (第3種郵便物認可)

松本市の寿小学校で 26日、空き教室を活用して休み時間に地域住民らと子供たちが交流する取り組みが始まった。大勢の子供たちが集まり、地域の大人たちと昔ながらの遊びを楽しむ大盛り上がりだった。

「普段あまりしない遊びがたたくさんあつて、2時間目終了後の休み時間に合わせてボラティアの住民ら約20人が訪れ、子供たちはチャイムと同時に会場へと詰めかけた。お手

玉や折り紙を教わったりゲームで対戦したりとにぎやかに笑い声を響かせ、大人も子供も一緒に遊んで楽しんでいた。

4年生の女子児童は「普段あまりしない遊びがたたくさんあつて、2時間目終了後の休み時間に合わせてボラティアの住民ら約20人が訪れ、子供たちはチャイムと同時に会場へと詰めかけた。お手

参加した白瀬泰雄さん(69)「寿豊丘は」

「びつくりするくらい集まってくれて張り合っていく。子供たちも生き生きと楽しんでいた」と目を細めていた。

住民によるプロジェクトチームが空き教室を利用した子供の居場所づくりを考へる中で、世代間の触れ合いや住民が訪れやすい学校づくりを目指して企画した。

画した。新年度からは名称をつけて定期的に開催する計画だ。

小嶋和好校長は「願っていたような自然な形で交流が始まりありがたい。無理なく続けていければ」と願っていた。

(鎌倉 希)

遊びを通して地域の大人と交流する子供たち



# 世代間交流 寿小に拠点

## 26日に初回 空き教室活用 休み時間に

住民と学校との交流が盛んな地域性を土台に、地域づくり協議会児童福祉部会を中心とするプロジェクトチームが学校を交えて検討を重ねてき

た。当初は放課後の居間の休み時間に合わせ、住民らが空き教室に滞在し、児童が自由に訪れ、一緒に遊ぶなどを楽しむ。年度内は試行的に3

松本市寿地区の住民らが寿小学校の空き教室を利用し、子供の居場所や、地域住民と子供たちの交流の場をつくる取り組みを進めている。世代間の触れ合いを深めるとともに、住民が当たり前のよにいられる学校づくりを目指しており、26日に最初の交流を迎える。

(鎌倉 希)

回実施し、新年度は月2回程度定期的に開催する計画だ。

当時はメンバーが中心となるが、住民の参加を促し開催頻度を増やして



交流会場となる教室に集まり、打ち合わせをするメンバー

いきたいという。本年度は住民の学びの場としての活用も願う学校側の意向を踏まえ、学校に親しむ機会として公民館講座を空き教室で開催する試

みなども行ってきた。12日は15人が集まり、会場となる教室で最終の打ち合わせを行った。児童福祉部会長でチームリ

「ターの竹瀝那美さん(6)は「子供たちも喜んでくれるだろうし、地域の人の張り合いにもなる。一緒に楽しい時間を過ごし、長く継続できれば」と願っていた。

同校は「本来学校は地域のもの。日常的に地域の皆さんがいられるようになれば、子供たちの安心にもつながる」と歓迎している。